

## 公開ワークショップ

# 言語教育は変わらないのか？ 変わりたくないのか？

—インクルーシブな教育を実現するために—

日時：2026年 9 月 5 日(土)

11:00～16:00 (受付10:30～)

定員：70名 要事前申し込み

(会場の収容定員と入館許可証発行の都合上、事前申し込みが必要です。お申込みは右の専用フォームをご利用ください)

会場：関西大学 東京センター

(JR東京駅日本橋口直結)



これまで私たちが経験したり、見聞きたりしてきた言語教育を振り返り、誰かが排除されてこなかったかについて問い直します。その上で、ケース教材を用いて、学習者一人ひとりへの支援や配慮に着目する**個人モデル**だけでなく、「排除」を生み出す制度や教育環境そのものを見直す**社会モデル**の視点から、インクルーシブな言語教育の実現について考えます。

第1部(11:00～12:30)

私たちはどんな「排除」を経験してきたか

昼食は、各自ご用意ください

第2部(13:30～15:00)

ケース教材をもとにしたディスカッション

第3部(15:10～15:40)

質疑応答、まとめ



公開ワークショップ専用サイト(随時更新)⇒

## 入場無料

要事前申し込み

～8月31日まで

(何らかの情報保障が必要な方は、8月5日までに以下の申込フォーム内でご相談ください)

お申込み：



## 主催

「言語教育におけるインクルージョンを考える会」

植村麻紀子(神田外語大学)

中川正臣(城西国際大学)

古屋憲章(帝京大学)

山崎直樹(関西大学)

池谷尚美(横浜市立大学)

当会のHPは[こちら](#)



本ワークショップは JSPS 科研費(課題番号 24K04060)と外国語授業実践フォーラムの助成により開催します。

## ＜公開ワークショップ＞

言語教育は変わらないのか？変わりたくないのか？  
—インクルーシブな教育を実現するために—

2026年9月5日（土）11:00-16:00  
関西大学東京センター

## 第2部 13:30～15:00

### ケース教材をもとにしたディスカッション

|             |                     |
|-------------|---------------------|
| 13:30-13:45 | ケース教材の構成を「足場ケース」で説明 |
| 13:45-13:55 | 「開示ケース」について説明       |
| 13:55-14:00 | 各ケース内で3～4人ずつのグループ分け |
| 14:00-14:45 | ケースごとにグループ・ディスカッション |
| 14:45-15:00 | ケースごとに全体シェア         |

# ケース教材のめざすもの

肢体  
不自由

聴覚  
障害

視覚  
障害

学習環境

「平均的な  
／多数派の  
学習者」

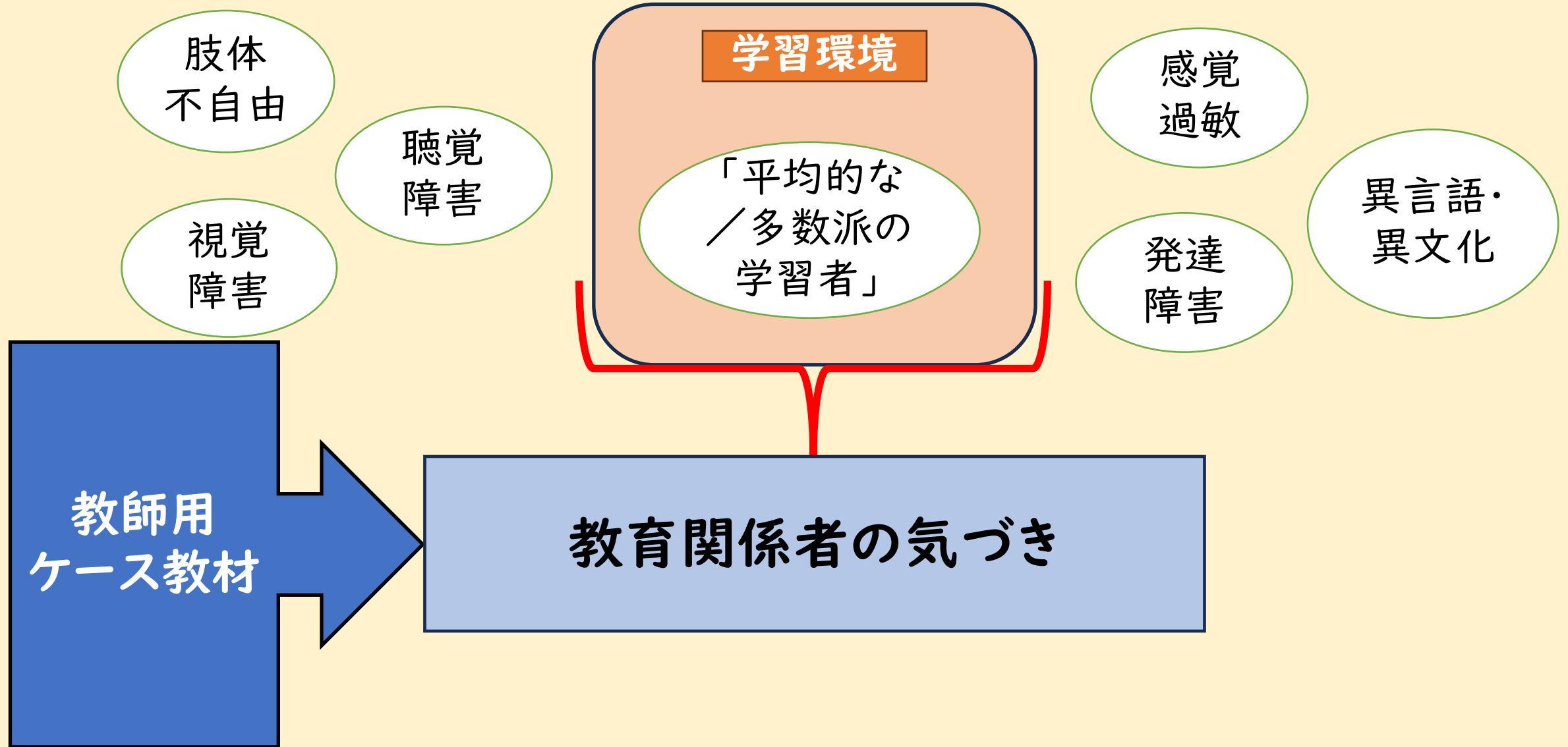
感覚  
過敏

発達  
障害

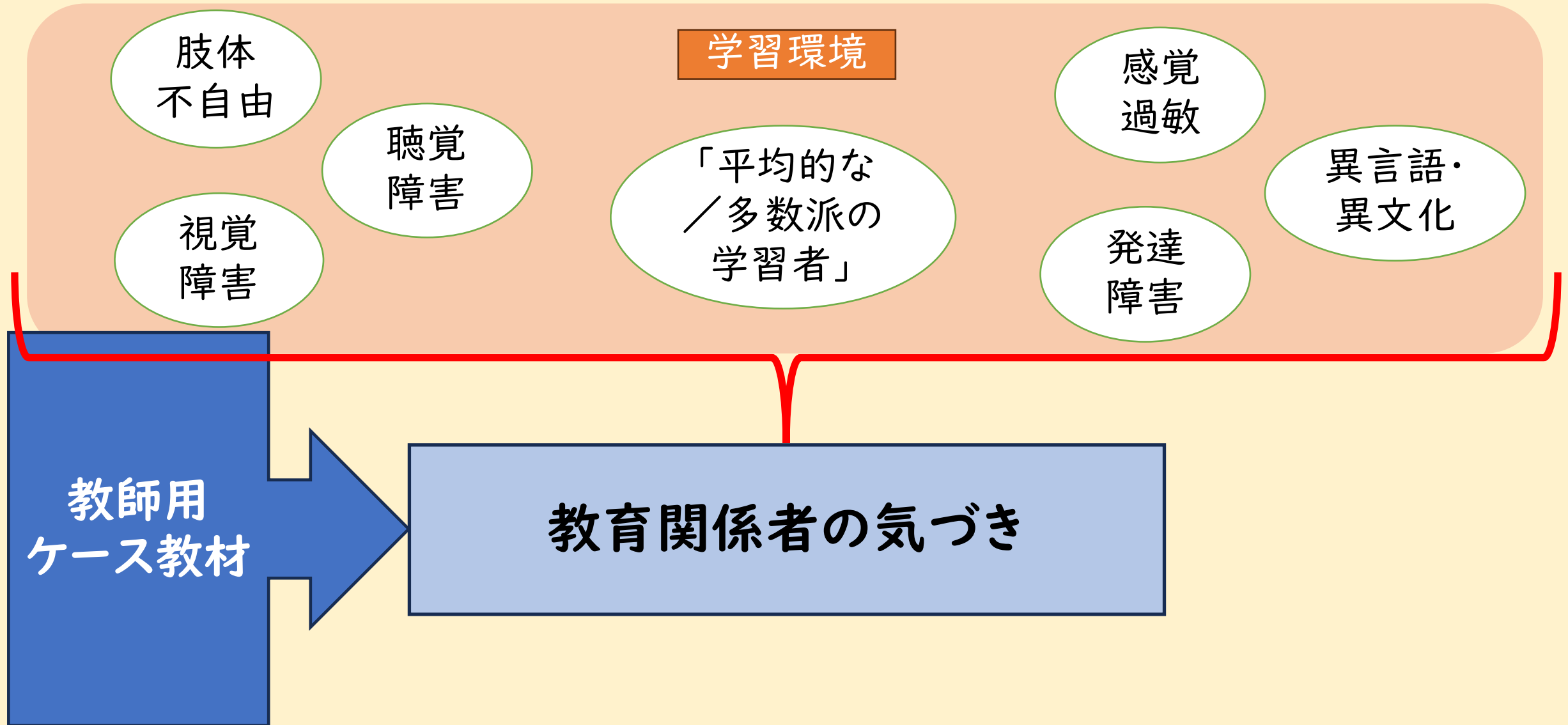
異言語・  
異文化

教師用  
ケース教材

教育関係者の気づき



# ケース教材のめざすもの



# 教師用ケース教材

## ケース1 漢字は手で書かなければならない？

### ケースを読む前に

- ①あなたは手で文字を書くことが困難な学習者に接したことがありますか。
- その学習者は具体的にどのような困難を抱えていましたか。
- ②手で文字を書くことが困難な学習者は、言語学習を行ううえで、どのような困難があると思いますか。
- ③言語を学習するうえで、文字を手で書くことは必要だと思いますか。それはどうしてですか。

学習障害の一つに手で字を書くことに困難を抱える書字障害があります。外国語の学習に限らず、学習においては、これまで伝統的に、板書を書き写す、手で書いて覚える等、手で書くことが重視されてきました。しかし、近年の急速なデジタルデバイスの発展により、学習において、手で書くことは必ずしも必須ではなくなっています。BYOD (Bring Your Own Device) を推奨する教育機関も多くなってきました。一方で、特に日本語教育や中国語教育、あるいは国語教育において、漢字を学習する場合、手で書くことが必須であると考える教師も多いようです。

本ケースでは、手で文字を書くことに困難を抱えた学習者に関するケースをおとして、学習障害を抱えた学習者を包摂することの意味や多様性と言語教師のピリーフの関係を考えます。

### ケース1：「パソコンで入力する期末試験」を希望します。

山本千里

わたしは大阪にある学生数の多い私立の総合大学で、非常勤講師として中国語を教えています。おもに第二外国語として中国語を学ぶいろいろな学部の子のクラスを担当しています。この大学では、第二外国語を必修にして2年間学ばせる学部もあれば、必修は1年間で2年目以降は自由選択にしている学部もありますし、完全に自由選択の学部もあります。選べる第二外国語は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語です。

必修にしている学部の学生の動機づけの強さはさまざまで、熱心に授業に参加する学生もいれば、必修なのでいやいや参加している学生もいます。ただ、熱心に授業に参加している学生であっても、コースが終了した後も学習を続ける学生はとても少ないと思われます。

わたしが担当する経済学部1年生のクラスに中野さんという学生がいます。彼は「手書き」を苦手としています。このクラスは、中国語未習者のクラスで、週に2回の授業があります(もう一方の既習者クラスは他の教師が担当しています)。ありふれた構造中心の入門用教科書を使い、知識を問う筆記のテストと、パフォーマンスを何回かさせて、それらを併せて評価しています。受講生は30名ほどです。

中国語は漢字で表記するため、中国語の学習には漢字を手で書く作業が欠かせません。中国とシンガポールで使われている簡略化された字体の漢字(簡体字)にせよ、台湾と香港で使われ

## ケース2 スケジュール管理が苦手で、忘れ物ばかり

### ケースを読む前に

- ①あなたは今まで友達との約束や課題の提出を忘れてしまったことがありますか。普段、あなたはスケジュール管理で工夫していることはありますか。
- ②いままでに、スケジュール管理に苦労している人が身近にいましたか。また、そのような人は、大学生活や言語学習などの授業の場で、どのような困難に直面すると思いますか。
- ③あなたは自分が担当している学習者の件で、大学や教育機関から「配慮申請」を受けたことがありますか。その「配慮申請」に対して、あなたはどのように対応しましたか。
- ④時間や期限を守ることについて、日本の社会通念ではどの程度重要視されていますか。「自己管理ができない人」はどのようなイメージで捉えられているでしょうか。

発達障害の一つにADHD(注意欠如多動性障害)があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。具体的には、友達との約束や締切を忘れる、約束の時間に遅れる、などです。

スケジュール管理に関しては、この障害を持つ人は一般的に「時間感覚に鈍いこと」があります。例えば、外出するときに、自分では「まだ余裕がある」と思って別のことを始めたり、身支度に時間がかかって自宅を出る時間を過ぎてしまい、遅刻をしてしまうことがあります。また、課題の提出がある場合には、課題があることを忘れてたり、課題が多すぎるとパニックを起こして、何から手を付けたらよいのかわからないままに時間が過ぎることも往々にしてあります。また、たとえ締切日を知っていても、「締切まであと〇日」という実感を掴みづらく、その結果として提出が間に合わないということも起こります。

次に紹介する事例のように、既に診断がついている学習者の場合には、大学の学生課を通じて、授業担当教員に「配慮申請」が寄せられることも増えてきました。ですが、その具体的な配慮の方法が一律的で、学習者本人の支援として十分でないこともあります。

このケースで問題になっているのは主にスケジュール管理の問題です。これは言語学習だけではなく、大学生活、ゆくゆくは社会生活でも問題になる重要な事柄です。このケースでは、学習者が学習をよりスムーズに行い、より良い大学生活を送るための支援の可能性と、その際に教師として学習者の自律を促す教育者としての葛藤について考えます。

## ケース3は当事者のナラティブをもとに、フィクションや架空の登場人物を交えて、作成されている。

### 問 A. 個人レベルの問い

Q1:鈴木さんは、課題が出た時と課題の締切前に、どのように考えていますか?鈴木さんの心の内を想像してみましょう。

Q2:スケジュール管理について、鈴木さんが今までにはじめてどう対応を取ったか、どう思っていますか?

### 問 B. 学習空間レベルの問い

Q1:あなたの授業に参加している学習者の「多様性」には、どのようなものがありますか?

Q2:この授業が2科目でなく、他の時限だったら、昼休みの活用以外にどんな対応が考えられますか?

Q3:この大学では、多様な学生に対応するために、配慮申請をどう改善したらよいでしょう?

Q4:鈴木さんのような学生でも、留学を含めたより良い大学生活を送るために、大学全体としての仕組みやサポートについて、何が必要でしょうか?

### 問 C. 社会レベルの問い

Q1:鈴木さんは「人と一定以上に親しくなるのを避ける」と言っています。具体的にどのようなトラブルが起きたと考えられますか?そのような状況が起きるのは、ダイバーシティ、インクルージョンの観点から見て、社会的にどのような問題があるでしょうか?

Q2:スケジュール管理がうまくいかない人が身近にいた場合、「自己責任」だと一方的に片づけても良いでしょうか?「自己責任」と言われる背景には、どのようなものがあるでしょうか?

Q3:時間や期日を守めることは、日本社会ではどの程度重要なことでしょうか?他の国ではどのように考えられていますか?もしあなたが日本以外の国で暮らした経験がある場合、その国と日本を比較してください。

### ディスカッション

これまでの「問い」を参考に、考えてみてください。

Q1:どのような授業なら、鈴木さんのような学習者も参加しやすいでしょうか?

Q2:鈴木さんを含めた多様な学習者が過ごしやすい大学はどのような場でしょうか?あなたは大学のファカルティメンバーとして、大学にどんな改善を提案しますか?

Q3:多様な人たちが生きやすい社会はどのような社会でしょうか?あなたが帰属している社会が「こうなったら良い」と思うのは、どんな社会ですか?また、その社会を実現するためには何が必要でしょうか?

\*\*\*\*\*

### ケースの解説

#### <ADHD について>

発達障がいの一つに ADHD(注意欠如多動性障害)があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。

# ケース教材の構成

1. ケースを読む前に
2. ガイド文
3. ケース（ある教師の語り）
4. いろいろな声（困り事を抱えた学習者、その他の教師、職員、周囲の学生等）
5. ケースについて考える（3レベルの問い）
6. 解説文 → 本日は提示せず

# 1. 「ケース」を読む前に

## 「足場ケース」を例に

- ① 出された課題を前に、立ちすくんでいる学習者を見たことがありますか。その学習者は具体的にどのような困難を抱えていましたか。
- ② 靴を履くときにブーツストラップがあるように、初めの一步を踏み出すのが困難な学習者に、言語学習を行ううえで、どのような支援ができると思いますか。

## 2. ガイド文

- 本ケースの学習者は肢体不自由であることから、高校まで特別支援学校に通っていました。そこでは、学習者一人ひとりに合わせて、教師が手厚くサポートする体制が取られていました。大学進学後も、障害支援室を中心に、本人の希望にできるだけ沿った支援計画が練られ、合理的配慮がされていますが、このような学習者にどの程度、こういった配慮をすべきか、現場の教師は戸惑うことも少なくありません。
- 本ケースでは、障害の有無に関わらず、初めの一步を踏み出すのが困難な学習者に関するケースをとおして、言語教師がどのような足場かけ(Scaffolding)をすることができるか、またすべきかについて考えます。

### 3.足場ケース：ゼロからイチにするのが苦手です！ ～足場かけ(Scaffolding)をどの程度すべきか～

ゼロからイチにするのが苦手です。

あゆみさん



何から手をつけていいかわかりません。  
特別支援学校では、先生がいつもサポートしてくれていたのに……。

韓国に関する  
ことを調べて  
グループでス  
ライドにまと  
めて発表して  
ください。



田中先生

# あゆみさんの背景と特性

- ・ あゆみさんは脳性麻痺による肢体不自由で車椅子生活。
- ・ 小・中・高は特別支援学校。個別に配慮された学習環境。
- ・ 韓国ドラマに影響を受け、独学で韓国語学習を開始。
- ・ 視覚情報処理や情報整理が苦手で、見通しの立たない課題に強い不安。
- ・ 大学では黒板の撮影許可など合理的配慮を受けている。
- ・ 「ゼロからイチ」にするのが苦手だと自覚している。

# 本人および教師の困りごと

- ・授業では「韓国に関することを調べて発表」という課題が出された（グループワーク）。
- ・あゆみさんは真面目でコミュニケーション能力もあるが、あゆみさんのグループは何から始めたらよいか分からず。
- ・家族の助けもあり、テーマ設定、分担、構成ができ、結果的には良い発表ができた。
- ・「テンプレートがあると始めやすく、1から10は得意」との本人の言葉。
- ・教師は「ゼロから考えるのが勉強」と感じており、足場かけをどこまですべきかに悩む。

# 支援のあり方をめぐって

- ・ 支援学校では、教師が個々の特性に合わせて支援していた。
- ・ 大学では、あゆみさんの合理的配慮申請を受けて、課題の進め方等、担当教員と相談できる体制になっている。
- ・ 田中先生は「0から1を生み出すことこそが学習」と考えている。
- ・ 支援すべきか、見守るべきか、教師の中でも意見が分かれている。

# いろいろな声①（あゆみさん／田中先生）

## ■ あゆみさん

- ・ 大学では授業で分からない点を整理し、個別指導も受けている。
- ・ サポートに感謝しているが、「一人で何から始めていいか分からない」と感じることも多い。

## ■ 田中先生

- ・ 「0から1」が苦手というが、そこを考えるのが勉強では？
- ・ あゆみさんは熱心で協調性がある学生。初めはクラスメートと相談していたが、作業が進まず、家族のアドバイスを受けたようだが、クラスメートの対話で解決できなかったのか気になっている。



## いろいろな声②（花山先生／職員の水川さん）

### ■ 花山先生

- ・ 課題には工程例や過去の作品、ルーズブリックを提示すべき。そういった足場かけは必要な支援では。
- ・ AIとの対話で支援の一部を担う可能性も示唆。



### ■ 水川さん（職員）

- ・ ASD傾向の学生に関する知識や支援経験がある。
- ・ 学生に丸投げではなく、教師や職員が適切に足場をかけるべきと主張。
- ・ 特性に関する理解が教員・学生の両方に必要と訴える。

# 5. ケースについて考える

教師は学生に対して、  
「今はわたしが手伝ってあげるけれども、これくらいできないと、社会に出てから困るのはあなたですよ」といったことばを言いがちです。それについて、どう思いますか。

**社会レベル**  
(制度、イデオロギー、常識)

**学習空間レベル**  
(学習者が集うコミュニティ)

**個人レベル**  
(個人の特性や障壁)

ゼロからイチにするのが苦手な学生がいる場合、どんな配慮が必要ですか。

田中先生がとったあゆみさんへの対応についてあなたは  
どう思いますか。

## 5. ケースについて考える

Q1: あなた自身、「何から手をつけてよいかわからない」と感じた経験はありますか。

Q2: 田中先生と花山先生の教育観について、どのように考えますか。教師がまず何らかの「足場かけ」をするのか、学習者同士が相互に補い合うことをまずは黙って見ているべきなのか。

Q3: あなたが田中先生の同僚だったら  
あゆみさんへの対応についてどんな意見を述べますか。

## 5. ケースについて考える

- Q1：ゼロからイチにするのが苦手な学生がいる場合、どんな配慮が必要ですか。
- Q2：どのような点を意識して一緒に活動するよう、学生たちに声かけしたらよいでしょうか。
- Q3：特別支援学校などから進学してくる学生への対応として、大学は（教員として/職員として）どのような事前準備が必要でしょうか。

## 5. ケースについて考える

Q1：教室に限らず私たちの周りには、困難なことが目に見える人と、見えにくい困難を抱えている人がいます。どのように気づき、支援しますか。

Q2：教師は学生に対して、「今はわたしが手伝ってあげるけれども、これくらいできないと、社会に出てから困るのはあなたですよ」といったことばを言いがちです。それについて、どう思いますか。

Q3：AIや個別最適化学習の時代において、「足場かけ」の意義や方法はどう変化すると思いますか。

## 第2部：グループワークの流れ（「足場ケース」を例に）

自己紹介+こちらのケースを選んだ理由を一人1分で話してから、ディスカッションしましょう。

### 社会

Q1:教師は学生に対して、「今はわたしが手伝ってあげるけれども、これくらいできないと、社会に出てから困るのはあなたですよ」といったことばを言いがちです。それについて、どう思いますか。

### 個人

Q2:田中先生と花山先生の教育観について、どのように考えますか。

### 学習 空間

Q3:ゼロからイチにするのが苦手な学生がいる場合、どんな配慮が必要ですか。どのような点を意識して一緒に活動するよう、学生たちに声かけしたらよいでしょうか。

# 開示ケース：「配慮」の理由を開示しますか？

- 「発表会」で、ある学生が「音がうるさくてがまんできない」といきなり主張し、ヘッドフォンをつけたまま参加していました。
- 「発表会」に参加する意志がないように見えるため、周りは騒然とします。しかし、本人はそれ以上説明しようとはしません  
.....

# ケースを検討する前に

- 自分の授業で、受講生がサングラスをかけたまま、あるいはヘッドフォンをつけたままで見たら、どう対応しますか？しかも本人がそのことについて、何の説明もしようとしないとしたら？
- 世間では「障害・病気」と思われている特性をもった学生に対し、「それ、クラスの皆に理由を説明したら、皆、わかってくれると思う」と言いたくなったことはありませんか？しかし、当の本人が、それを自分の弱みと考え、他人に知られたくないと思っていたら、どうしますか？

# 「開示」ケースの紹介

- 大学の留学生センターで、コース修了時に大規模な公式発表会を開催。
- 留学生Sさんが発表時に、突然「会場の音声がうるさくて耐えられない」と訴えた。
- 教員には、音量は通常の範囲で、特に大きいとは感じられなかった。
- Sさんは自分の発表後、ヘッドフォンを着けたまま会場にいた。
- 周囲には、それが「他人の発表を聞く気がない挑戦的な態度」のように受け取られ、ざわついた。

# 教員の反応(1)

吉見先生：

教室では脱帽させているし……「決まりごと」だからでヘッドフォンを取らせるか、理由（聴覚過敏？）を説明して了解を求めるか、どちらかで。

森田先生：

そんな決まりごとはない。宗教上の理由などでいろいろな被り物を認めている。

# 教員の反応(2)

吉見先生：

発表会のときは人の話を聞くのは常識だ。

森田先生：

彼は「聞いている」と主張している。

# 教員の反応(3)

吉見先生：

本人がみんなに理由を説明できないのなら、我々が代わって説明したら……

シム先生：

本人の承諾なしに個人的事情を暴露するのは絶対だめ。

# 教員の反応(4)

吉見先生：

配慮申請も出ていないのに……

古川先生：

申請がなかったら配慮をしてはいけないということにはならない。

「過度な負担」でもない。

# 本日、考えていただきたい「問い」(I)

今回のようなケースで、「『障害』『疾病』のための特別な措置なのだから、その理由をある程度、開示することはやむをえないのでは？」という疑問を持つ人もいるかもしれません。あなたはそれに対して、どう思いますか？

## 本日、考えていただきたい「問い」(2)

このケースでも言及されている「授業中は脱帽すべき」というルールはよく耳にします。他にも、「授業中は飲食をしてはならない、勝手に席を立ってはならない……」というルールもあるようです……日本に数多くある「教室でのタブー」は、すべて学習の進行のために本当に必要なものだと思いますか？不要なものがあるとしたら、それは何でしょう？

# 本日、考えていただきたい「問い」(3)

このような問題が起こらないようにするため、教室ひいては学校全体の学習環境に関して、教職員および学校が事前にできることは何だと思いますか？

## 第2部：グループワークの流れ（「開示ケース」を例に）

自己紹介+こちらのケースを選んだ理由を一人1分で話してから、ディスカッションしましょう。

社会

Q1：今回のようなケースで、「『障害』『疾病』のための特別な措置なのだから、その理由をある程度、開示することはやむをえないのでは？」という疑問を持つ人もいるかもしれません。あなたはそれに対して、どう思いますか？

社会

Q2：このケースでも言及されている「授業中は脱帽すべき」というルールはよく耳にします。他にも、「授業中は飲食をしてはならない、勝手に席を立ってはならない……」というルールもあるようです……日本に数多くある「教室でのタブー」は、すべて学習の進行のために本当に必要なものだと思いますか？  
不要なものがあるとしたら、それは何でしょう？

学習空間

Q3：このような問題が起こらないようにするため、教室ひいては学校全体の学習環境に関して、教職員および学校が事前にできることは何だと思いますか？

# 2つのケースごとにディスカッション

- 14:00-14:45 ケースごとにグループ・ディスカッション  
14:45-15:00 ケースごとに全体シェア  
(人数少ない方は教室Cへ移動)

「足場ケース」と「開示ケース」それぞれに分かれて、3～4人1グループで話しあい、最後にケースごとにシェアします。

(足場ケースは教室右側で植村担当)

(開示ケースは教室左側で山崎先生担当)